

2006FIFAワールドカップドイツ大会観戦記

成瀬和弥¹

1. はじめに

2006FIFAワールドカップドイツ大会(以下、ドイツ大会とする)は、6月9日から7月9日の31日間の日程で、ドイツ連邦共和国の12の都市を舞台に開催された(表1)。それぞれの大陸の予選を勝ち上がった32カ国が、AからHの8グループに分かれ、4チーム総当たりのグループリーグを戦い、上位2チームが進む決勝トーナメントで、優勝が争われる。このような対戦方式のもとドイツ大会では、計64試合が行われた。

FIFAワールドカップ(以下、W杯とする)は、4年に1度開催されるが、世界の一流プ

レーヤーが一堂に会するその競技レベルは、世界最高の水準にあることは、あらためていうまでもない。数々のプレーが伝説となり今日でも語り継がれている。一方、スポーツイベントという観点からも、その規模は注目値する。ドイツ大会において、延べ視聴者数は300億人を超え¹⁾、経済波及効果は、日本国内だけで4,759億円規模と試算された²⁾。この世界的なイベント(祭典)を現地で観戦する機会を得た立場から、今大会における①スタジアム、②交通及び宿泊施設、③関連イベントの3点について報告する。

2. ドイツ大会の概要

まず、戦績等からドイツ大会を概観する。

日本サッカー協会が作成した「2006FIFAワールドカップドイツ大会」JFAテクニカルレポート(DVD)の指摘にもあるように、今大会は総じて、いわゆるサッカー強豪国が順当に勝ち進んだ大会だったといえよう。出場国のなかで過去に優勝経験があるドイツ、ブラジル、フランス、イタリア、イングランド、アルゼンチンが、それぞれグループリーグを順当に勝ち上がり、決勝トーナメントに進んだ。決勝トーナメントでも、好ゲームが続いたが、優勝の最有力候補と目されたブラジルが、ジダン選手を擁するフランスに準々決勝で敗退することとなった。決勝戦は、イタリアとフランスの対戦となり、PK戦の末、イタリアが5大会ぶり4回目の優勝を果たした。周知のとおり、日本は、グループFに入り、オーストラリア、クロアチア、ブラジル

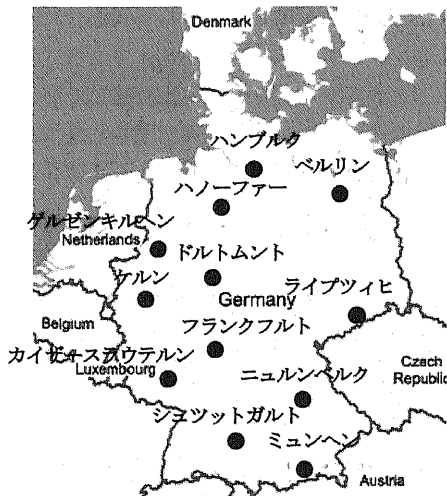


図1 2006FIFAワールドカップドイツ大会開催都市

1 筑波大学体育センター

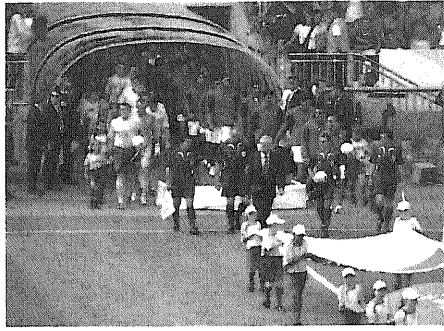


写真1 イタリア対オーストラリア戦
(カイザースラウテルン)

と対戦し、2敗1分けという結果で、決勝トーナメント進出はならなかった。

ドイツ大会の傾向を数字でみると、全64試合で147ゴールが生まれた。試合平均にすると2.29ゴールとなる。W杯の試合数が64試合となった過去2大会(1998年フランス大会、2002年日本・韓国大会)と比較すると、フランス大会は171ゴール(試合平均2.61ゴール)、日・韓大会は161ゴール(同2.52ゴール)となり、ドイツ大会は過去2大会に比べ、最もゴール数が少ない大会となった。

最多得点チームは13ゴールのドイツで、2位は12ゴールのイタリアだった。両チームとも7試合の合計である。ちなみに、1試合あたりの平均得点では、4試合で9ゴールを挙げたスペインが2.25のトップであった。得点王には、5点を挙げたドイツのクローゼ選手が輝いた。ハットトリック記録者はなかった。1試合に同一選手が3得点以上を挙げるハットトリックは、これまでの17大会すべてで記録されてきたが、今回は、W杯史上初めて、ハットトリック記録者不在の大会となった。

このように、ゴールに関する数字を大まかにみる限り、ドイツ大会は守備がより重視される傾向にあることを示す大会であったといえるだろう。

ドイツ大会は、ゴール数が減少した一方

で、反則が頻発、準々決勝のオランダ対ポルトガル戦のように、ラフプレーが横行する試合も見られた。警告は345枚、退場は28枚を数え、史上最多となった。競技規則が2006年春に改正され、肘打ちや危険なタックルは退場処分にされるといったように、基準がより厳しくなったことも反則数増の理由と考えられる³⁾。

3. スタジアム

ドイツ大会でW杯は、18回目を数える。ドイツでの開催は、1974年以来(当時は西ドイツ)2度目となる。W杯を2度以上開催したことがある国は、ドイツの他に、メキシコ(1970年、1986年)、イタリア(1934年、1990年)、フランス(1938年、1998年)の4カ国である。

1974年大会では、開催期間は、25日間で、開催都市数は9都市、出場国数は16チームであった。1974年大会の9都市のうち、今大会は、デュッセルドルフをのぞく8都市が試合会場を提供している(図2)。このうち、フランクフルト、ゲルゼンキルヘン、ハンブルク、ミュンヘンのスタジアムが新築され、ベルリン、ドルトムント、ハノーファー、シュツットガルトのスタジアムが改修して使用された。また、ほかの4都市に関しては、スタジアムの新設は、ライプツィヒのみで、ニュルンベルク、カイザースラウテルン、ケルン



写真2 オリμπピアシュタディオン
(ベルリン)

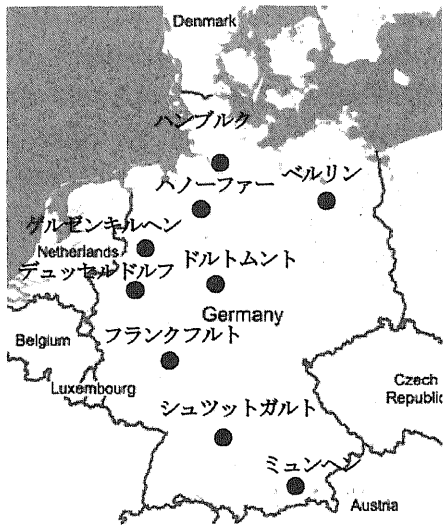


図2 1974FIFA ワールドカップ西ドイツ大会開催都市

のスタジアムはそれぞれ改修され使用された。図1からわかるように、東西ドイツの統一にも関わらず、旧東ドイツ地域の会場は、ライプツィヒだけであった。

大会期間中現地にて、グループリーグ2試合及び決勝トーナメント4試合を観戦し、4つのスタジアムを訪れた(表1)。ベルリンのオリンピアシュタディオン以外は、サッカー専用スタジアムであり、収容人数は4万人以上であった。いずれのスタジアムも、どの位置からもピッチ全体をくまなく見渡せ、座席の幅及び前列との間隔もゆとりをもってつくられ非常に観戦しやすかった。

スタジアムへ入るには、2ヶ所のゲートを経なければならぬ。座席位置は、大まかに

表1 観戦したスタジアムの名称及び収容人数

都市	スタジアム名	収容人数
ライプツィヒ	ツェントラルシュタディオン	43.000人
ドルトムント	FIFA ワールドカップスタジアム ドルトムント	65.000人
カイザー スラウテルン	フリッツ・ワルター シュタディオン	46.000人
ベルリン	オリンピアシュタディオン	72.000人

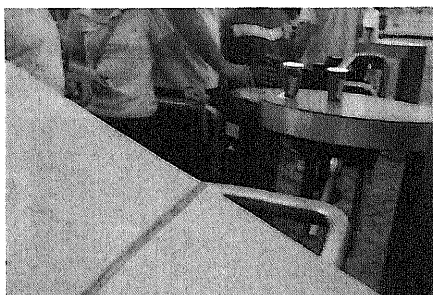


写真3 スタジアムの入場ゲート (ライプツィヒ)

4ブロック(赤、青、緑、黄色)あり、スタジアム周辺は、色分けされた案内板が適所に設置されスムーズな誘導が図られていた。

1つ目の入り口は、セキュリティチェックのためのものである。チケットと所持品がチェックされ、カバンの中身はもちろんのこと、ボディチェックもされ、ビンやカン、ペットボトル、発炎筒など危険物、ペットなどの持込みは禁止であった。この入り口を抜け、しばらく歩くとスタジアムに入るゲートがある。ここで、チケットを読み取り機に挿入し、認証されるとゲートが開き、ようやく

スタジアムに入ることができる。さらに、自分の座席につく前に、再度チケットをスタッフに見せ、チケットに標記された正しい座席に座っているか確認された。チケットに名前が記入され、本人以外は入場できないのではという心配もあったが、実際は、本人確認は一切されず、チケットさえ所持していれば自由に入場できた。

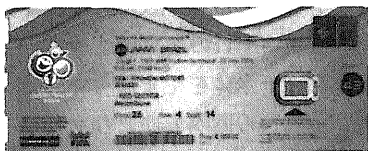


写真4 チケット（日本対ブラジル戦）

所持品チェックや案内等は、ボランティアらしきスタッフが行っていた。ボランティアスタッフは、老若男女様々で、記念撮影に気軽に応じたり、道案内を笑顔で懇切丁寧にしたりするなど、「A time to make friends」という大会テーマに相応しい対応を心がけているようだった。大会を成功させようとする意気込みと誇りが感じられた。

観戦した試合はいずれも満席であった。それにも関わらず、導線の整備が行き届いているためか、異常な混雑はなかった。仮設トイレを設置するなどして、混雑緩和に対応していた。スタジアム内では、飲食等の販売があったが、ビールはバドワイザー、ソフトドリンクはコカコーラ社のものしかなかった。すべてW杯のスポンサー企業の商品であっ



写真5 試合前のウォーミングアップ
（日本対ブラジル戦）

た。そのため、どのスタジアムも同じ品揃えで、味気なく感じられた。その土地ならではの名物があれば、観戦もより味わい深いものになったに違いない。

スタジアム内のドリンク用カップは使い捨てではなく、再利用されていた。使用后、売店に返却すると1円が戻された。この方式の効果か、カップの放置はほとんど見られなかった。環境への配慮がこうしたところにも表れ、すばらしい取り組みである。

試合前及びハーフタイムのスタジアム内は、テーマソングが流れる程度で、過剰な演出はなくすっきりしたものだだった。

すべてのスタジアムには、ドイツ大会のスローガンである「A time to make friends(世界よ来たれ、友のもとへ)」と「Say no to racism(人種差別にノーと言おう)」が書かれたフラッグが、ゲーム前のセンターサークルに設置されていた(写真5)。人種差別問題は、サッカー界でも大きな問題のひとつとなっていて⁴⁾、6月30日と7月1日には、FIFA反人種差別デーと銘打たれた特別イベントが行われた。これは、準々決勝のゲーム前に、両チームのキャプテンが、人種差別反対を訴えていた。しかし、決勝戦で起こったフランスのジダン選手の暴力行為の引き金になったのが、相手選手による人種差別的な発言であったとの憶測があるなど、人種差別問題は、サッカー界でも根深い問題であることを印象付ける結果となった。



写真6 ドイツ大会スローガン

各スタジアムに共通していたのは、太陽光を上手く利用している点である。観客席は、雨に濡れないようすべて屋根で覆われているにも関わらず、陽の光が差し込み、開放的な空間を創出していた。

4. 交通及び宿泊施設

2週間の滞在期間中、12都市を訪れた。移動手段は、公共交通機関で、ほとんどは鉄道(Die Bahn)であったが、ドイツは、鉄道網が発達しており、時間の大幅な遅れもなく、車内は快適であった。W杯開催期間中は特別な時刻表が組まれており、列車の本数も通常より増発されていた。非常に便利であったのが、Die Bahnのホームページである。Die Bahnのホームページでは、出発地から目的地までの経路及び到着時間、運賃を検索することができるため、便利なサービスだと感心した。

車内では、W杯取材のカメラマンやジャーナリストに遭遇した。彼らプレスは、IDパスで、無料で列車に乗れるらしくすこぶる評判が高かったようである。

宿泊は、スケジュールの確定している日程分は、旅行代理店を通して日本で予約した。4月上旬の時点で開催都市のホテルは、すでに満室だったため近接都市に宿泊することとなった。先にも述べたように、ドイツは交通網が整備されているため、スタジアムとホテルが離れていても、大きな不便はなかった。宿泊料金も開催都市とは違って、リーズナブルな価格で宿泊することができた。現地ホテルを探した場合でも、開催都市以外であれば、容易に確保することができた。

ドイツは、メッセなど大規模なイベントを比較的頻繁に開催しているため宿泊需要が大きいため、宿泊施設に関しては既存のもので十分であったと思われる。

5. W杯関連イベント

ドイツ国内は、まさにW杯一色であった。W杯開催にともなって、さまざまな関連イベントが行われていたが、特に、ファンフェスト(FAN FEST)について紹介したい。

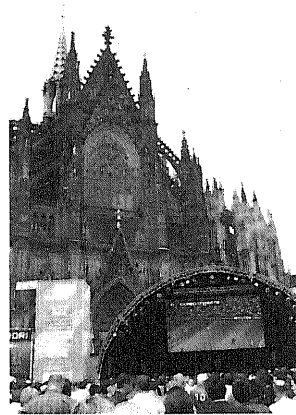


写真7 ファンフェスト会場(ケルン)

「ファンフェスト」は、W杯史上初の公式ファン・フェスティバルのことで、開催都市のすべてにおいて、当日試合が行われるスタジアム周辺に特設会場を設け、ファン同士の交流を深め、試合を盛り上げるイベントである。特設会場には、大型スクリーンを設置し、試合を中継するほか、趣向を凝らしたプログラムが用意されていた。例えば、ベルリンでは、ファンフェストの一環として、ブランデンブルク門から戦勝記念塔までの「6月17日通り」の約2キロを「ファンマイル」として開放し、コンサートなど様々なイベントが行われた。

このファンフェストを利用して、各都市では様々な文化プログラムも展開されていた。日本庭園があり、また日本対オーストラリア戦が行わるなど、日本と縁のあるカイザーラウテルンでは、世界で活躍している日本の和太鼓バンド「GOCOO」のコンサートが行われた。

ファンフェストには、各国のファンがそれぞれの応援スタイルを身にまとして参加し、大いに楽しんでた。その雰囲気は、熱気と活気に満ち溢れ、それはまさにお祭りであった。実際の試合は、スタジアム内で完結するが、ワールドカップは、スタジアム内だけにとどまらず、都市全体を巻き込んだ様相であった。試合が行われるスタジアムまでの道のり、試合後にスタジアムを去る道のりもまた、W杯の一部であることが実感できた。各国サポーター同士が交流し合える「場」の重要性を認識した。

応援スタイルには、各国で独自のスタイルがあり興味深かった。自国のユニフォームやチームカラーを身に付けるだけでなく、例えば、ブラジルのファンは、サンバの衣装を身にまもっていたし、メキシコのファンは、ソブレロ(つばの広い鮮やかな帽子)をかぶるといった具合に、象徴的なファッションで着飾る観客も少なくなかった。イタリアのファンはパスタ(マカロニ)を紐でつなぎネックレスに、オーストラリアのファンは、ビニールのカンガルーの模型を担いでいた。一目でこの国のファンかがわかるのである。

応援の方法も個性的で、独自の応援方法がある。アルゼンチンは、チームカラーである水色と白のタオルマフラーかユニフォームを応援歌にあわせて振りまわす。スタンドを埋めたサポーターがそれを一斉に行う光景は、



写真8 イタリアとオーストラリアのファン

実に圧巻である。地元ドイツのサポーターは、特に物は使わずに、皆で掛け声を発していた。地の利を生かした大応援で、地鳴りのような声援は、ドイツ代表の今大会3位という好成績とは無縁ではあるまい。メキシコの応援も非常に独特であった。相手チームのゴールキックの際には、必ず「プート!」と大合唱する。それは、誰かが指揮して声を合わせているのではなく、自然と合っているのである。ゴールキーパーのプレッシャーは相当なものであっただろう。また、相手選手がファールを受けて過剰に痛がっている際も、メキシコファンからこの言葉が容赦なく飛んだ。メキシコの応援では、この「プート」という言葉をよく耳にしたが、意味を聞いてみたところ、非常に汚い言葉であるらしい。

6. おわりに

ドイツでの日々は、否応なしに4年前にわが国で行われたW杯を想起させた。日本代表を除いて、全体的に今大会の選手のコンディションは日韓大会に比べ、良かったと思われる。そのため、番狂わせもなく、各チームが本来の力を発揮できたのではないか。そのような大会で、日本は、3試合で勝ち点1という結果に終わった。他国の選手に比べ、日本選手の技術や体力、さらには気力は特に劣っていたにも関わらず、わが国の多くのジャーナリストや解説者は、敗因の所在をジーコ監



写真9 ブラジル戦直後の中田英寿選手

督の戦術や采配とした。いったい3試合のなかで、日本が相手ゴールエリア内に入って何本のシュートを打ったであろうか。ゴールから離れた場所からシュートをいくら打ったところで、得点する確率は極めて低い。おそらく、この結果が現時点での実力であろう。日韓大会の時の好成績を実力であると受け止めて、ドイツ大会でも決勝トーナメント進出を確実視した、わが国の安易な報道姿勢及びそれに踊らされた世論に疑問を持たざるをえない。

各国のファンと交流して実感したのは、彼らはサッカーというスポーツを心から楽しんでいるということである。当然のことながら、母国のチームを必死に応援する。しかし、選手が素晴らしいプレーをしたときは、敵味方関係なく、惜しめない拍手を送る。それは、見栄えのする派手なプレーとは限らない。地味ながら良いプレーを評価する姿勢が当然のように共有されているように感じた。

また、彼らはただ試合を見るだけでなく、それに付随するすべてのことを楽しんでいった。前述のように、キックオフの何時間も前

にファンフェストに集まり、仲間同士これからの試合に向けて大いに盛り上がる。そして試合後は、相手チームのファンとお互いの健闘を称えあったり、ユニフォームや記念品を交換したりしていた。ドイツ大会では、このような光景が随所でみられた。それは、ただ試合に勝つという成果主義あるいはナショナリズムに固執しない、独自のサッカー観、スポーツ観が根底にあるように感じた。ドイツ大会は、サッカーの奥深さ、スポーツの奥深さを体感する好機であった。

参考資料

- 1) 宣伝会議, No.687, p20
- 2) 株式会社 電通 コーポレート・コミュニケーション局 広報室, 電通ニュースリリース, 2006年3月16日
- 3) 日本経済新聞, 2006年7月5日付
- 4) 朝日新聞, 2006年6月7日付
- 5) 2006FIFAワールドカップドイツ大会オフィシャルサイト
(<http://fifaworldcup.yahoo.com/06/jp/>)